報告

前原町の古墳発掘

古代「伊都国」の歴史解明へ

会員　事野　穀　仁

本篇は、福岡県糸島郡前原町の三雲地方の発掘調査に出会った筆者が、古代国家伊都国の歴史解明に期待し、福岡市へ転住の往復会員に連絡したものである。

謹呈

初夏の頃にお別れして以来、ご無沙汰しております。毎月の「佐伯史談」で、あなたのご研究を読ませていただいておりますが、福岡でのお暮らしは、また新たなものがあるようかと存じます。

実は、十一月二十四日、私は福岡県糸島郡前原町にまいりました。その夜のこと、旅館のテレビで、前原町の原田大六氏を委員長とする「伊都国の発掘」が明日から始まることを知りました。よの好きの私のこととて、翌日用事を早々にすませて、現地を見学に行くことにしました。

あなたもご承知のように、今回の発掘地点は三雲地方を中心にした広範囲と聞いて、行って見ますと、この付近は広々とした水田地帯であります。町の中心から車で二十分ほど走ったころ、道路ぎわに「福岡県教育庁文化課　井原・三雲遺跡調査事務所」の看板が見つかりました。

「大分県から来た者ですが……」ときり出してみると、係員はあっけにとられたていで、「ニュースは早いなあ。今その準備を始めたばかりです。先刻近くの細石神社で、原田大六氏らによる鏡石式がすんだばかりです。ごらんの通り、この田園一帯の発掘を、今日から来年の三月まで続行して、一応のめどをつける予定ですから、もっと先においでになったほうがよかったのではありませんか」といそがしげに話してくれました。

私は鏡入式のあった細石神社を尋ねた後、再び発掘調査事務所に向っていると、はるか前方にもうもうと煙が立ちこめて、その中に人々の群を見ました。近づいてみると、地元の主婦達が三十幾人、田圃を清掃しているのです。

一方では、係員と地元の男達が、縄を張り杭を打っていました。「もう一か所あの森の向うで作業している一団がある」というので、本隊かも知れないと思って行ってみましたが、遂に見つけることができませんでした。しかたなく、平原遺跡の標示がある所まで来ましたので、そこをたずねてみることにしました。

全体の地形からみると、田圃から隆起した小高い丘でしょう。なだらかな坂道を登って行くと、両側に蜜柑園が見えてきました。その中にポツンと一軒屋があって、庭にいる主婦に道を尋ねて登ると、枯草の中に標示板が立っています。それには次のページのように書かれてありました。

上図は、福岡県糸島郡の中心部
前原町の関係地図です。

平原遺跡

ここには次の三つの遺跡があります。

一　弥生古墳（二世紀前半）

二　東古墳（三世紀頃）

三　弥生式土器窯址（紀元前一世紀）

弥生古墳

長さ約十三米、巾八米の周溝方形墳にして、墳の中央に四米四方の土壙があり、内に巾一米長さ三米の割竹形木棺を納めたあとを遺していた。木棺の内外から、日本最大の鏡四面、ほか舶載鏡など計四十二面の白銅鏡、玻璃製の勾玉、瑪瑙製の管玉、琥珀製の丸玉及び素環頭太刀一口を副葬していた。

東古墳

東古墳は双円墳にして主体部を失われていたが、十六人を埋めたと思われる殉死溝をとどめていた。

弥生式土器窯址

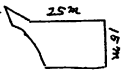
四注造りの屋内に窯をきずき、一度に五個の土器を焼くようになっていた。屋内には作業場、屋外には土採りの穴を遺していた。

注意　（この二行は朱書）

現状変更をかたく禁じます。

前原町教育委員会

この遺跡は周囲の地面よりやゝ低く、雑草は短く、針金で囲んでいます。歩測で東西二五米、南北一五米で、



こんな変形したものでした。説明文をたよりに古や窯跡はどのあたりか、またどのような仕組みになっているのか思案しましたが、私の力ではあやしい見当しかつきませんでした。おもしろかった点は、いまだに炭化して黒ずんだ地面が露出した部分があったり、周溝を横切って暗渠が見られたことです。

こうして一人でさまよっている間、二組の見学者が来ましたが、納得した様子もなく、すぐ立去りました。管理者は始めて来た人や素人にも、古墳や窯跡がほぼ分かるように標示するのが親切だと思いました。

やがてここを去り、眺望のよくきく小高い一角に立って周辺を見渡すと、古代人の生活舞台の実感がいよいよ強く、研究心をそそられることしきりでありました。

福岡市から自転車で見学にやって来たという一人の大学生と別れて、前原町の中心部へ歩いていると、心地よい疲労感を覚えてまいりました。駅前の旅館を尋ねたのは、もう五時もだいぶ過ぎていました。

夜、旅館の主人に今日のできごとを話すと、主人は非常に興味に乗ってこられ、原田大六氏の家がすぐ近くにあることや、原田氏が中学の後輩で、頑固一徹の郷土史研究家であることや、とくに遺物の復元などその技術たるや神技であるなど、おもしろい話をしてくれました。そして、昭和四十年原田氏が中心で発掘した、平原遺跡の調査記録の冊子を見せて下さったので、はじめてその全ぼうが明らかになったわけであります。旅館の主人は鬼木不次男さんという紳士で、吉備真備の造った怡土城

にまつわる家柄で、郷土史に深い関心を持っていられることがだんだんわかってまいりました。

遠慮のない私のことで、さっそくお願いをいたしました。それは明朝、町の全貌が見える小高い笹山公園に登って、前原町の地理や歴史について説明して下さいませんかと申しますと、快く承知して下さいました。

翌二十六日はまあまあの天気でしたので、指さす玄海灘をはじめ、元寇の際の蒙古軍の進路から、怡土と志摩が糸島となったそうですが、両者が中に挟んだ低地を、埋め立てて新田としてでき上った形状を、はっきりと見ることができました。右方にかすむ怡土城跡や、昨日ぶらついた三雲、井原発掘地点を確認できたことは、大へんな興味を覚えたものです。話しが現在に及んできて、街の主だった建物の一つ一つの説明をきいていると、これが古代から一貫した人間の営みかと思うと、果てしない未来を想像してみたくなります。

「ここは博多から汽車で一時間足らずの距離で、田園都市といえないでもないが、とりたてていえる産業もなく、古代史を主軸にした観光行政に焦点を合わせるべきでしょう。」と鬼木さんは話されました。遠方を眺め、お話を聞いていると、朝鮮半島が迫ってくるようにさえ感ぜられます。

「ではこれからあの地点にあたる『糸高郷土史展示場』にご案内しましょう」と云われて、下山いたしました。

ここは、以前旧糸島女学校跡で、この運動場一帯の地下には、古代遺跡が埋もれているので、一さい手をつけさせないよう、原田大六氏が町に申入れたため、そのまま放置しているとのことでした。運動場の一角に、こじんまりした鎌倉造りの建物が資料館です。説明板には次のように記されていました。

志登支石墓群出土品収蔵庫

志登は地名、支石墓とは約二千年前の弥生時代に造られた大石を使用した机状の墓でドルメンともいいます。ここから約一、五〇〇米の地点に遺跡があり昭和二十八年十二月に文化財保護委員会により発掘調査され、南朝鮮の基盤状支石墓の伝播であることが確認された。その調査による出土品を、糸島郡各地の出土品とを比較して、その解明に役立てようとしたのがこの収蔵庫である。出品点数五〇〇点に見られる「伊都国」殷盛の一端をここに見ることができる。

昭和四十七年四月

前原町教育委員会
前原町文化財保護委員会

守衛からいただいたパンフレットを手にして、中に入ってみると、無土器時代からの鎌倉時代にかけての出土品が、無駄なく整然と並べられています。この周辺から出土されたものだけに、歴史専門家や郷土の人々には、興味つきないものがあることは、素人の私に強烈に迫って離さないものがあることでもわかるのです。

帰りしなに鬼木さんは、「日本古代に於ける遺跡は、北九州に大半あるというが、さらにその大半がこの前原町にあるといわれています。」そういわれてみれば、この町の大地を歩く時には、室の上を歩く心持ちさえするのも不思議ではないのです。

十二時の汽車の時間が近づいたので、鬼木さんにお礼を申して、前原町を後にいたしました。

佐伯に帰って、翌二十七日の読売新聞に、「人間登場 原田大六さん」と、写真入りで掲載されているのを見て、あらためて興味をおぼえました。

「伊都国発掘（福岡県糸島郡前原町）はさる四十年、同じ町の平原弥生古墳で一度行なわれている。この時、原田さんは調査団長。仿製（ぼうせい）銅鏡では最大の、内行花文八葉鏡（直径四十六・五セチ）四枚のほか、舶載橋（中国製）も含めて鏡が四十二枚、鉄製刀一本、ガラス製勾玉三個、メノウ製管玉十二個など、多数の副葬品を掘り起こした。

一方、江戸時代末期には、平原遺跡の近くの三雲南小路、井原鑓溝（いばらやりみぞ）両遺跡でも、三種の神器が数多く見つかったことが、黒田藩の学者青柳信の記録にある。

◇三遺跡とも、伊都国王の墳墓で？

「伊都国が邪馬台国に先立ち、紀元前一世紀から二世紀にかけて繁栄したことは、魏志倭人伝などから明らかでしょう。伊都国王は少なくとも十五代続いたとみているが、いま確認されているのは、平原、三雲、井原三代の分だけ。今回の調査面積は百メートルで、従来とはケタ違いの本格的な調査ですから、王の墳墓は必ず出ますよ。」

◇この王が皇室の祖先？

「平原遺跡の被葬者が玉依姫（たまよりひめ）、つまり天照大神。大鏡は八咫鏡（やたのかがみ）で、神武天皇が大鏡をたずさえて東征して大和政権を樹立した。神話は生きているんですよ。」大胆といえば大胆。「平原遺跡から出土した三種の神器は、弥生―古墳時代の出土品としては質量ともに最高で、明らかに、当時頂点にいた人物の副葬品。それに八咫を、周漢の尺度で算出すると、大鏡とほぼ同じ大きさ。伊勢神宮のご神体、八咫の容器の内径は〝延喜式〟などによると、一尺六寸三分（約四十九セチ）。大鏡にぴったりでしょう。」

この追求力と説得力。今回、トップリーダーに選ばれたのは、アウトロー的存在だった原田学説が見直されてきたから、とする見方も強い。

少年時代から神話や考古学に興味を抱いたが、本格的に打ち込み出したのは「耶馬台国東征説」で知られる中山次郎九州大名誉教授に教えをこうてから。終戦直後、二十九歳の時だった。以来この道一筋。

この人も、多くの考古学者がそうであるように、考古学的な事実に基づいて「耶馬台国畿内説」をとる。

小学教諭の妻イトさんと二人暮らし。福岡県糸島郡前原町出身。旧制糸島中学卒。五十七歳。（養父支芳記者）

以上長いお便りとなりましたのも、実は佐伯史談会が来年の行事計画の中に、あなたの引率の元に、北九州を見学するやに聞いておりますものですから。さいさい、博多から前原まで足を延ばし、三雲、井原の発掘現場の見学ができたら、大へん収穫があるのではなかろうかと思ったからです。勿論来年三月までの発掘の成果如何によりましょうが――――。

あなたが、佐伯地方の郷土史について、生字引であることは人の知るところです。そのあなたが、歴史の本舞台に永住されたことによって、日本歴史の本流にふれ、一層の広い資料と深い研究が得られることと思います。そうした位置と歴史的視点から、古代、中世史に薄い辺鄙な海部佐伯をどう及られていくか、あなたご自身もお

考えになるでしょうし、私たちも知りたいのです。またそうした案が、佐伯史談会員の視野をひろめ、啓蒙して下さるのに格好のスケジュールではなかろうかと思っています。

このことは史談会の評議員会で検討し、あなたとのご連絡を十分とって決定されるものと存じますが、来年でだめなら次の年でも、また少数の有志でも、いつの日にか実行できることを願っています。

どうかご健康に留意されて、ご研究がいつまでも続くようお祈りするとともに、ご家族の皆様によろしく申して下さい。

ではこれで失礼します。

昭和四十九年十二月二十日　　毅具

佐脇貫一様　　市野瀬　仁

（おわり）

探訪記

びろうの葉陰の古塔

―米水津村竹野浦御手洗を訪ねて――

会員　羽柴　弘

去る一月十一日、土曜日の午後、私は米水津村教育委員会の高宮氏と共に、竹野浦の御手洗家を訪うた。ご主人は村議会の関係でお帰りになっていなかったが、夫人が快く迎えて下さり、希望した古文書八通ばかり見せていただいた。

見なれた毛利藩の漁村の庄屋への文書の外に、慶長六年六月の「入津米津寄」と題する浦々の書上帳と、初めて見る漁撈関係の文書と、今一つ、佐伯惟定から御手洗家の率いる「海部衆」に対する感状があった。この三点については、写真にとらせてもらっているので、次の号で紹介させていただく。

紙のべて薄日に写す古き文字

（古い石幢の姿）

御手洗家の裏山は孟宗の竹林で、数本のびろうが交っていて、その厚い葉陰に上図のような石幢が建っている。明らかに室町時代の初期のものだと思われる。惜しいことに風蝕がはげしく、記銘が全くない。

笹鳴れど古塔はしずか苔むして

あたりに、春の高さを越す元禄期の御影石の墓が何基もあるが、それらに交って、古風な墓がいくつもある。元和二年の墓がまず見つかったが、少しはなれて慶長の年号がある。元年であったか、二年であったか、とにかく今から三百八十年も前の古い墓で、ちゃんと戒名、年月日が読み取れる。あるいはもっと古い天正、いや更に何十年かさかのぼれる、室町時代のものがあるのではあるまいか。

この墓地、天然記念物指定のびろう、それに御手洗家のもつ古文書史料の調査と共に、長時間をかけたい。

次の機会を改めて設定したいと考えた。

（墓い古の家洗手御）